

詩篇103篇

0 ダビデによる

A. 自分への賛美の促し

- 1 わがたましいよ、【主】をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。
2 わがたましいよ、【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

B. 憐れみ深い主への感謝

①個人的感謝

3 主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、4 あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、5 あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、鷲のように、新しくなる。

②民族的感謝

(1) 出エジプト

6 【主】はすべてにいたげられている人々のために、正義とさばきを行われる。7 主は、ご自身の道をモーセに、そのみわざをイスラエルの子らに知らされた。8 【主】は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。9 主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。

(2) 捕囚からの解放

10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。13 父がその子をあわれむように、【主】は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

③はかない命／永遠なる神の恵み

15 人の日は、草のよう。野の花のように咲く。16 風がそこを過ぎると、それは、もはやない。その場所すら、それを、知らない。17 しかし、【主】の恵みは、とこしえから、とこしえまで、主を恐れる者の上にある。主の義はその子らの子に及び、18 主の契約を守る者、その戒めを心に留めて、行う者に及ぶ。19 【主】は天にその王座を堅く立て、その王国はすべてを統べ治める。

A'. すべての者への賛美の促し

- 20 【主】をほめたたえよ。御使いたちよ。みことばの声に聞き従い、みことばを行う力ある勇士たちよ。
21 【主】をほめたたえよ。主のすべての軍勢よ。みこころを行い、主に仕える者たちよ。
22 【主】をほめたたえよ。すべて造られたものたちよ。主の治められるすべての所で。わがたましいよ。
【主】をほめたたえよ。

本篇は「卓越する歌の高み」（スポルジョン）、「最も美しい花」（ヴァイザー）などと評されるほど、多くの読者に愛されてきました。作りとしても音楽的で美しく、「賛美の促し」としての「A」に挟まれる形で、「憐れみ深い主への感謝」としての「B」が豊かに描かれています。タイトルに「ダビデによる」とありますが、内容的に見てこれは捕囚帰還後の作品と考えられますから、高名なる王の名が充てられただけでしょう。

A. 自分への賛美の促し

冒頭の「A」で、詩人は自らの心に賛美を呼びかけています。「主をほめたたえよ」という表現が繰り返し出てきますが、彼は「わがたましい」に訴えている。1節では「私のうちにあるすべてのものよ」とまで言われていますが、これは「私の内臓すべて」という意味のことばであり、当時人の心は内臓に宿っていると考えられていましたから、すべての心を傾けて賛美をささげることが求められているのでしょう。彼は何故に賛美するのか。それは、「主の良くてくださったこと」を一つひとつ思い出すがゆえです。

B. 憐れみ深い主への感謝

①個人的感謝

詩人はまず、自分の人生に与えられた神の恵みを語り始めます。彼はどのような経験をしてきたのでしょうか。「咎を赦し」「病をいやし」「いのちを穴から贖い」「恵みとあわれみとの冠をかぶらせ」「一生を良いもので満たされる」という内容から、彼は死に瀕するような病が癒され、罪の赦しを見出したことがあったと思われます。そして、その後の人生に豊かな祝福が与えられた。

「あなたの」と言いながら、詩人は自分に対して二人称で語りかけているのです。彼は自分の人生に現れた恵みを一つひとつ数え上げながら感謝をささげました。「あなたの若さは、鷺のように、新しくなる」という力強いフレーズは、毎年羽が生え変わる鷺がその度に若返ると信じられていたところから来ているようです。聖霊が与えられた人は「日々新たにされる」（Ⅱコリント4:16）というパウロのことばとつながってきます。

②民族的感謝

次に詩人はイスラエル史を振り返り、主が罪深い民に対して何をしてくださったかを思い起こしています。ここでは、「出エジプト」と「捕囚からの解放」が並べられています。いずれの出来事も異教徒による虐げと拘束からの解放という点で一致しています。

6～9節では、出エジプト後イスラエルの民が度重なる不従順を神に対して表したことが、それを神が幾度も赦されたことがまとめられています。「【主】は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである」という有名な聖句は、神がモーセに対して語られたご自身の倫理的性質です。このような神によって、イスラエルは赦され続けてきました。

10～14節には、直接は「捕囚からの解放」を表すことばはありませんが、主語が「私たち」に変わっているところから、詩人自身が昨今経験した贖いの経験について語っていることが分かります。「出エジプト」は歴史の中で何度も形を変えて繰り返される。「民の不従順 → 裁き → 悔い改め → 解放」というパターンは、詩人もバビロン捕囚を通してその目で見えてきたのです。そして、すべての出来事のうちに神の恵みがあったことを最終的に知ったのでした。

③はかない命／永遠なる神の恵み

15節では、人の命が「草」「野の花」に例えられています。これは、人間という存在のはかなさ、その一生の短さを物語る表現です。55年に及ぶ捕囚の期間に死んでいった仲間たちが多くいたのでしょう。私たちの人生も吹けば飛んでしまうような脆いものです。それでいて、多くの試練や困難に直面し、激動の世にあって翻弄されます。

「しかし」(17節)という「神の接続詞」は、どんなときにも、人の殺伐とした人生にいのちの息吹を吹き込みます。このような私を顧みてくださっている方がおられる。「【主】の恵みは、とこしえから、とこしえまで、主を恐れる者の上にある」「主の義はその子らの子に及び、主の契約を守る者、その戒めを心に留めて、行う者に及び」と。主との契約は、常に恵みに基づいています。主の側が、不従順な者に対して、ご自身の真実に基づいてその契約を守り続けてくださるのです。

A' . すべての者への賛美の促し

以上見てきたように、詩人が賛美せずにおられないのは、彼が「自身の歴史」と「民の歴史」に表された神の恵みを思い起こしたからです。私たちの人生にはどのような恵みが与えられているのでしょうか。「数えてみよ、主の恵み」(聖歌172番)。

後半の「賛美の促し」では、「御使いたちよ」「みことばの声に聞き従い、みことばを行う力ある勇士たちよ」「主のすべての軍勢よ」「みこころを行い、主に仕える者たちよ」「すべて造られたものたちよ」と、礼拝者だけでなく天の御使いにまで呼びかけがなされています。神の栄光を最も間近で見ているのが御使いであり、彼らこそまことの賛美をささげることのできる存在であるならば、この詩人が述べていることはおこがましくさえ聞こえてきます。しかし、詩人はこの御使いの大合唱を聞きたいのではありませんか。私たちの眠ったような賛美に力を添えてほしいのではありませんか。地上では権力の統制によって賛美の歌声が押し殺されてきた歴史が古今東西にあります。困難な状況下にある者たちに勇気を与え、真の賛美へと導くのが御使いたちです。私たちも、如何なる時代・場所・状況下にあったとしても、御使いの援軍が送られることを心に銘記しましょう。